

博物館における表象行為と社会的差別

—— 差異の表象をめぐる ——

吉 村 智 博*

I 問題の所在

近年の地域博物館論や博物館展示論には、豊富な実践例や明確な課題設定が盛り込まれており、わたくし自身も多くの示唆と啓示を受けている。例えば、近年、博物館展示をめぐる思想的営為が盛んになるなかで、展示表象行為そのものを、デレ＝ジェゲデ [1997] は「キュレーターの『再創造』」と規定し、千野香織 [2000] は『『学芸員』の創りあげた『作品』』だと論じ、久留島浩 [2002] も歴史展示に「博物館の構成する確かな『過去』」の色濃い反映をみている。これらの議論をうけて、認識論を射程に入れた議論が博物館をめぐる活性化している。それは、金子淳 [2001, 2003] がいうように博物館に内在化している「政治性」そのものが、批判的検討の対象とされているからに他ならないと思われる。

一方、わたくしたちを取り巻く社会情勢に目を転じてみても、「グローバリズム」「ナショナリズム」といった表現に象徴される戦略的な思考と、「帝国」「国家」「国民」「民族」「人種」などの表象が巷間に溢れているのだが、これらの概念の妥当性を問う議論も活性化しつつある。とりわけ竹沢泰子らの共同研究は、「人種」概念そのものの普遍性や生物学的有効性を問いつつ、「人種」概念に基づく差異は人為的に創出されたり、歪曲されたりしたものであっても、社会的にはリアリティをもつとして表象に注目している [竹沢編 2005, 2009]。

博物館学芸員としてのわたくしも、目まぐるしく変転する世界像・社会観、ひいては博物館像から自由ではあり得ず、そのなかに身を置きつつ日常の仕事に携わっている。現代社会ほど自明の価値観や思考枠組に再考が迫られている時代はないと自覚しながら、学芸員としての展示表象行為と自己の位置についてあらためて整理してみると、わたくしが主に展示表象の範疇としてきた社会的差別や人権といった、人と人との、あるいは集団と集団との関係性を問う際

* よしむら ともひろ 大阪人権博物館学芸員

にこれまで有効に機能してきた概念がゆらいでいることに気づく。

本稿は、社会的差別をテーマに展示表象するに際して立ち現れる課題について、わたくしの学芸員としての経験と省察を通して考察しようとするものである。主として差異の表象をめぐる問題に光をあてたい。等身大の人間に焦点をあてて、その生活・文化・思想などの諸側面と個性および属性を照合しつつ、ステレオタイプの人間像を創出しないように展示表象することは、実は容易なことではない。差異を過度に強調することによりマイノリティに社会的刻印（スティグマ）を付与しようとする行為に対抗する姿勢と論理を構築する作業が必要とされるからである。とはいえ、「差別」や「人権」という視点を採用することさえも、特定のマイノリティの課題として等閑に付されてしまいがちな現代社会において、「差別」を容認する風潮に対抗すべき実践を試みることは、これまで以上に重要となってきた。

本稿では、わたくし自身の仕事を構成している視点や方法について、これまで携わった展示表象行為の経験をふまえ、とりわけ、「歴史」や「現在」といった抽象的ではあるが展示と密接にかかわるキー概念を意識したいと考えている。「歴史」というタームは、その叙述に際して叙述主体の認識が投影されるものであるが、博物館展示に「歴史」という要素を導入して表象することは、あるコンテキスト（文脈）からモノ（資料）を意識的に取り出し、解釈を経て別のコンテキストへ置換する行為に他ならない以上、叙述と同様に展示主体の認識に大きく左右されることになる。ゆえに、歴史叙述をめぐる展開された「物語行為」論争¹⁾などを通じて気づかされる点も多い。例えば、展示表象の際に解釈する主体の立脚点を明確にせねばならない場合、この論争の過程で明確になった「語り得ぬもの」を語ろうとする立場の人々との共鳴・協働という立脚点がわたくしには相応しいものに思える。また、「現在」という時間軸の決定は、かつてドイツ史家ヘルマン＝ハインペルが、近代的自我を獲得した人間にとって「現在」という時間の認識が、必ずしも人々の間で共有されているものではない、と論じたこと²⁾も視野に入れる必要があると考えている。

Ⅱ 社会的差別と博物館

1 「当事者」性という思考

博物館における表象行為を成立させる条件としてまず何よりも、展示内容を徹底的に議論する場が保障されていることが必要となる。博物館の設置目的や理念を具現化した常設展示はいうまでもなく、特別展・企画展・特集展など期間を限って開催される展示にいたるまで、担当学芸員が中心となり、趣旨や目的、内容にまで踏み込んで合議を尽す場を設定することは重要なことである。資料解説やコーナー解説、そして構成など企画内容のディテールにいたるまで、主催する側の意図が広くコンセンサスを得られるようにするために徹底的に議論を交わすこと

は、いっけん容易なようであるが、なかなか実現しがたい。優れた展示や企画は、主催者が妥協しては実現しないとスタッフ各人に自覚されていれば比較的可能であるが、とくに民族や文化など表象対象が人間の社会的生活や日常的営為に直截関係する場合はさほど容易ではない。博物館が「当事者」の代弁装置や代行機関とならないようにしようとする思考がはたらき、かつ主題にかかわる表象そのもののあり方に博物館の主体性や自律性が問われるからである。

ここでいう「当事者」とは、社会的に被差別の立場に置かれている人々（マイノリティ）を想定すると理解しやすいが、個人を基礎単位としている。もとより運動や教育などの諸団体が「当事者」を核としながら数多く組織されているが、それはあくまでも一定の戦略的思考に基づいた存在であり、自発的な運動の方向性を見出し、諸権利を獲得することが目的となることが多い。ゆえに、集団的表象だけでは不十分で、個人の認識や立場こそが、「当事者」性を決定する重要な要件であり、自己表現のみならず他者表象においても本質的なものとなる³⁾。ただ、その際の「当事者」性とは、のちにも触れるように、他者認識との関係で安易で硬直した短絡的な関係に依拠しているものではなく、複層的で対話や行動の可能性を切り開く関係としての実在性を有するものである。

社会的差別という抽象的なテーマを具体化して展示する際、それぞれの専門領域をカバーする力量が学芸員に要請されることになるが、専門分野をもち、普段の問題関心を基本としながら、展示のテーマに応じた調査研究に臨むことが求められる。例えばわたくしの場合、専門分野は近代の都市部落および寄せ場の歴史的研究であるが、近年は多様なテーマを担当しつつ現代社会の課題となっている「ホームレス」問題についても関心を払うようになり、近現代の都市大阪をフィールドとするようになりつつある。いうまでもなく、館外の「当事者」や協力者との対話や意見交換、そして時には示唆に富むアドバイスなどのコミュニケーション行為が、わたくしの博物館活動の糧になっている。

2 「差別」「人権」とメッセージ性

博物館において歴史や現在に規定される問題を表象する意味はどこにあるのだろうか。こうした問いに直ちに回答を与えることは不可能だが、少なくとも歴史に刻印され現在に通底する「差別」や「人権」といった視点だけは常に意識してもちあわせておこうと思う。というのも、差別や人権をそぎ落とし、視野の外に置いてしまうと、歴史的事実や現代的課題を、そして何よりも自身の置かれている社会的状況を見落とし、展示のメッセージ性を著しく剥離してしまうからである。

ここで、「差別」と「人権」について、わたくしなりの定義を述べておきたい。

まず、「差別」については、次のように規定している。社会構成体の特質如何に関わりなく特定集団を規制するものとして作用し、不文律に共同体で内面化されつつ、慣習や習俗ないし

規範、そしてそれらの行為を顕在化させる潜在的意識として継承されてきたものである。その歴史性ゆえに、「国民国家」において市民的権利意識の覚醒と平等化および同質化の過程で露見しつつ問題視されるが、差別を生成する共同体の機能喪失を伴わない限り、本質的に解消されないという特性をもつ。そして、他者の行為実践を日常レベルで差異化しつつ、それを何らかの形で制御、抑圧、排除し、その実現を阻害する行為として立ち現れる。まさにネガティブな効果（不利益）をもたらす他者行為である。すなわち、当該社会の構成員が従うべきものとして存在する規範となり、1つの社会内の特殊なカテゴリー化によって発生する関係性ということになる⁴⁾。

「人権」については次のように認識している。西欧近代の価値規範として生成され、主として非西欧社会へと思想連鎖し、明文化された法典や規律として普遍化しつつ、教育活動等を通して定着してきたものである。その歴史性ゆえに、グローバリゼーションのもと国際基準の指標としてより強調され重要視されるが、差別を解消する要件とはならず、人権を強調することによってむしろ集団を序列づける新たな価値基準を創造する事態に至っている。脱「近代」化をはかる国民国家と「近代」化の過程にある国民国家との、人権問題をめぐる議論に明らかな温度差が生じていることを考えればより明瞭である。まさに人権が、主権をもつ結合体にその普遍化が委任されることによって、「国民」「国家」といった、仮想かつ創造の共同体の存在を前提として、思想実践されるからに他ならない。

このように社会的差別といった視点は抽象的ではあるが、博物館や学芸員にとって、歴史像の解明や現代社会の課題を明確に提示するために、有効な視点だと考える。だが、学芸員が日常におこなう展示に、差別といった視点を持ち込むことが有効であるにもかかわらず、しばしば困難な事態が起る。それは、観覧者（来館者）と、実際の展示をおこなう学芸員とが相互に働きかける関係性のみならず、そこに、いまひとつの立場である「当事者」を対置しなければならないからであろう。この三者の緊張関係によって変化しつつづけるのが、博物館の展示表象行為の基軸なのであろうが、日常的に対話し続けることは、博物館にとっても学芸員にとってもかなりの自覚と覚悟が必要となってくる。いうならば、「当事者」との議論（批判もふくめた）や対話が生産的で建設的であるという認識が、学芸員の間で普遍化され共有化されなければならないということになる。「当事者」との関係性を意識しつつ、観覧者（来館者）へのメッセージ性を担保する姿勢こそが、具体的な展示表象行為の過程で強く意識されるべきことであろう。

Ⅲ 表象をめぐる思索

1 具体的な展示作業の過程

9.11事件の衝撃が未だ醒めやらぬなか、2001年の9月から約2ヶ月間にわたって大阪人権博物館（大阪市浪速区）の主催により特別展「絵図に描かれた被差別民」が開催された。そのスタッフとしてわたくしは、それまで公開がタブー視され、差別を助長するものでしかないと過小評価されてきた前近代（とくに江戸時代）の絵図（古地図）⁵⁾の展示公開を実現させるために、歴史学や人文地理学の専門家である学芸員たちと協議をおこなった。費やした歳月は構想から数年にわたり、展示の具体化に向けて作業を開始してから延べ2年を要した。詳しい経緯や議論については、すでに拙稿「吉村2001」で論じたが、展示公開の経緯と、「当事者」および関係機関との協議について、そのプロセスが最重要であっただけに簡単に整理しておきたい。

展示ではまず、絵図（古地図）を公開する今日的意味を俎上にのせて検討した。さきにも述べたように、博物館展示は現代的課題をめぐってメッセージを発信できなければいけない、と多くのスタッフが自覚していたからであった。絵図（古地図）の被差別身分記載、例えば「穢多村」や「非人小屋」などの表記が単に過去の歴史的事柄としてだけ捉えられては、展示の意義はまったく失われてしまうのであった。その上で、従来の絵図（古地図）展示の問題点と課題とを整理し、展示公開の意味を再考した。そして「穢多村」について何の説明も付さずに無造作に展示した展覧会や、身分制度に関わる歴史的呼称を抹消・削除によって改竄して展示する展覧会が、現在の部落差別の理解にあたっていかに誤解と偏見を再生産してきたかを考えた。その上で、歴史的経緯をふまえた学術的な解説を付して展示することが、差別問題の歴史的研究に大きく寄与すると位置づけた。その際、あくまで差別の現実を踏まえた問題のたて方をすることを前提として展示の方法論を検討するよう心がけた。

こうして一定の議論をおこなったあとに取り組んだのは、「当事者」や関係機関との協議であった。さまざまな団体や絵図（古地図）が指し示す地域の人々、つまり地元の関係者とは十分な時間をかけて対話することにした。展示の必要性和公開にあたっての基本姿勢、それに展示内容の概要説明（場合によっては詳細な資料解説）など、委曲を尽くしてスタッフ全員で説明にあたった。展示資料や参考とする絵図（古地図）を一点ごと詳細に検討し、公開の意義について外部の人々と話し合い、かつ資料に付すべき解説文の根拠となる歴史的研究を踏まえ、特に前近代部落史を専門とする研究者を中心に構成された研究会で検討を重ねた。まさに、日々の些細な活動の積み重ねを繰り返したのである。今にして思えば、こうした協議の場を設定したことが大きく作用したことによって、幸いにも多くの関係者から協力を得ることができたのであろう。信頼関係を構築することが重要であることをこの時ほど痛感したことはなかった。

周囲の協力者からの支援を身を以て感じた絵図（古地図）展示での経験は、その後、日本最大級の「寄せ場」（日雇い労働者の生活拠点）である「釜ヶ崎」（大阪市西成区の通称「あいりん地区」）の資料探索や現地取材にも役立っている。大都市の社会的機能には包摂されていても、市民社会の取り結ぶ日常的な社会関係からは排除されることの多い「釜ヶ崎」に住み働く人々と多様な関係を築いている。そして、わたくしが「釜ヶ崎」の歴史的研究を続けている糧ともなっている。

このように、部落差別に限らず、社会的差別にかかわる資料の展示については、とりわけ「当事者」に向き合う博物館の姿勢が問われよう。「当事者」との討論や協議をくり返すことによってしか、信頼関係はうまれないとさえいえる。さきの拙稿で、わたくしは「パートナーシップ」という用語を使って「あるまとまった結合体としての『地域』の歴史や現状と向かい合うこと、そのうえで、その『地域』に生きる人びととの豊かで実りあるパートナーシップを構築すること、こうした日常的営為こそが、これからの博物館活動に欠かせない使命であろう」と記した〔吉村 2001〕。この基本的な認識に今も変わりはなく、今後も変わらないであろう。なぜならばこの姿勢こそ、学芸員としての日常的営為の基本だからである。

2 4つの責務と4つの協働

わたくしは絵図（古地図）の展示作業を通して、信頼関係を前提とする博物館にとっての重要な4つの責務（責任）について学んだ。1つは、収集の責務といえるもので、その博物館の設置・活動理念およびテーマに沿った資料を収集するといった、博物館の一般的機能にも明示されている基礎的な営為である。2つは、公開の責務とでも表現すべきものであり、所蔵資料の積極的な展示公開を推し進めていくといった、社会へ向けた営為である。3つには、協議の責務とでもいうべきものであり、「当事者」や資料の所蔵者との積極的な討論の場を保証し、十分な検討をおこなうといった、地域をともなう営為である。この場合の「地域」⁶⁾ というのは、博物館が直接働きかけ、またその活動への支援をおこないながら、相互に作用し合う関係をもつ一定のまとまり（共同体）を指している。そして4つには、解説の責務とでも呼ぶべきものであり、学芸員による蓄積された専門的知識が基本となる博物館ならではの営為である。この独自性、公共性、地域性、専門性こそは、博物館が主体となって、自覚的にかつ積極的に担保すべき共通の課題といえるのかも知れない。

あわせて、わたくしは展示作業の過程で、博物館を取り巻く多くの協力者との協働についても深く考えさせられた。第1に、さきにも述べたように社会的差別という場合はとくに「当事者」との信頼関係の構築は必要不可欠の要件である。第2に、専門分野の研究者や教育者など周辺から博物館を支援してくれる人たちとの交流と連携も重要な要素である。その点からして第3には、資料の所蔵者である他館の学芸員との情報のネットワーク化や課題の共有なども今

後の財産となっていくと感じている⁷⁾。そして第4に、何よりも展示を観覧し、博物館からのメッセージを受け取り、かつ新たな課題を提示してくれる観覧者（来館者）こそ、博物館展示の一番の評価者である。こうした人々との4つの協働の重要性をあらためて認識したのである。一般的に論じられている博物館の機能（収集保管、展示公開、調査研究、教育普及）論には回収しきれない社会的機能が存在するともいえる。

IV 記憶装置と他者認識

1 記憶装置としての機能

博物館に宿命的に課せられている社会的機能と他者認識の方法とはどういったものであろうか。論理性と実践論を統合した領域において⁸⁾、博物館が記憶装置として機能し、他者表象にあたっての認識論と方法論とを共有できる基盤をあらためて考察したい。前章で4つの責務と4つの協働ということを述べたが、それを前提にまずは、記憶装置としての博物館の視点からアプローチしてみたい。

博物館とは、モノ（資史料）の証言力を通して、来館者の想像力と洞察力といった感性に働きかけ、文字や映像として記録されたモノから普遍的な記憶を創造しようとする場に他ならない。ここで問題となる普遍性は、ある特定のコンテキストに置かれてきたモノ（所有の形態や来歴）を切断して、博物館の解釈に応じたコンテキストに置換し保存することをさす。その際、小川伸彦が指摘するように、保存世界の本質を見極めたうえで普遍的な意味を付与する必要がある。

小川〔2002〕によると、モノをその依存している文脈から部分的にでも切り離し、異種のモノを同じカテゴリーのもとに置きなおす際には、多くの場合、もとの定義よりもより抽象度の高い意味づけの枠が必要となる。さらに、複数のモノの差異を越えて存在していると想定される同一性・共通性が抽出されて初めて普遍的価値は内実を与えられ、差異の中に価値の同一性が見出されるようにモノが制御される。そして、博物館は単に記憶を保存・喚起するのではなく、それを構築する場所でもあり、「わたし」の記憶を「われわれ」の記憶へと変換させる場所である、という集合化のロジックが見出される。

しかし、モノに固有の来歴や差異に固執して、社会的差別問題の具体的様相を伝達しようと意図する場合、普遍性の提示は、実は大変困難であり、そのために表象対象を限定したり、メッセージ性を重視したツール（キャプション・語り）を採用したりすることになる。それらの採用にあたっては、展示主体である博物館としてのメッセージを可能な限り組み込むことになり、結果として、政治性を帯びることになるのである。

金子淳〔2001・2003〕は、展示表象行為に実際に携わった経験から、モノによる表象の意

図について「展示として表象しようとする際、何らかの意図や目的、イデオロギーが介在している以上、すでにそこには政治的な磁場が成立している。と論じる。さらに、モノ資料が「きわめて高度に抽象化された概念や理念にあてはめられてしまうと、個々の資料がもともと持っていた本来のリアリティを失う結果となる」とする。

わたくし自身の経験からしても、モノが誘発する来館者の認識は多くの場合、展示主体の意図と大きくずれることがある。モノ自体の解釈は千差万別であり、かつ来館者の主観に大きく左右されるからである。であるならば、展示表象によって記憶（再生産される、現状認識に基づいた、過去の特定の出来事を想起し意味を付与する行為）の分有は保障されうるのであろうか。この疑念は、岡真理[2000]による記憶の分有にかかわる本源的な問いに通底している。

〈出来事〉の記憶を分有するとはいかにしたら可能だろうか。〈出来事〉の記憶が他者と分有されるためには、〈出来事〉は、まず語られねばならない。伝えられねばならない。〈出来事〉の記憶が他者と共有されねばならない。だが、〈出来事〉の記憶が、他者と、真に分有されるような形で〈出来事〉の記憶を物語る、とはどういうことだろうか。そのような物語は果たして可能なのか。存在しうるか。存在するとすれば、それはリアリズムの精度の問題なのだろうか。だが、リアルである、とはどういうことなのだろうか [xvi 頁]。

岡の問いによってわたくしは、博物館展示がいかにすれば記憶の分有を可能とするか、深く考えさせられた。

2 他者認識と発話主体

日常的営為として、学芸員や博物館といった展示主体は、表象対象、観覧主体との間に成立するであろう、記憶の分有を前提として、多様なツールを採用しつつ展示表象というストーリーを構成している。吉田憲司が夙に指摘している博物館の民族誌展示をめぐる「展示する者」「展示される者」「展示を見る者」の対話関係が成立することが予見されているのである。そこには、省察的態度といった、獲得しにくい表象行為が前提として内面化されている。

ここでいう省察的態度とは、わたくしなりの経験にもとづいて整理すると、学芸員が自己の価値基準や画一的な認識を通して他者を表象する際にひきおこされる危険性を常に念頭に置きつつ展示に携わるという姿勢のことである。例えば、ホームレス問題を取り上げて展示を構成する際、日本社会における格差・貧困といった側面を強調するあまり、抑圧され排除される人間として彼らを表象してしまうことになる。そこからは、個々のホームレス（多くの場合は野宿生活者）の人間像ではなく、誇張された客体としてのメッセージしか「展示を見る者」（観覧者）に伝わらない。近年、日常生活のなかで地域社会や公共施設に積極的にコミットメントする機会がホームレスの間で増えているのだが、そのような主体的な営みを切り捨て、何の主張も主体的な営みもおこなわないかのような「虚像」を提示してしまうことになる。

一方、日本社会の少数民族や「病者」（ハンセン病回復者や HIV 感染者・AIDS 患者など）に焦点を当てて展示をおこなう場合、展示構成のあらゆる要素を、展示対象である「当事者」の主張や行動に回収し、学芸員が展示主体として、総合的な解説や表象の細部にまったく立ち入らないとすると、どうであろうか。学芸員が当事者に対して、あたかも「同情」「共感」するかのように接し、当事者のアイデンティティを絶対的なものとして固定化し、対話の回路を閉ざしていたとすれば、成田龍一〔2001〕が警鐘を鳴らす「安易な当事者主義」が存在するだけである。また、当事者の主張や理念を学芸員の展示意図と同一のものとして展示することは、当事者の代弁行為にほかならず、博物館展示とはまったく異質なものになってしまう。

以上のような点を踏まえるならば、展示主体としての自己の立ち位置（立場性とは位相の異なる意味で）を自覚的に表明する場合、主体、アイデンティティなど、展示行為の際に自明の前提としてきた概念の検証と再構成が必要となるのではないか。

恒常的に差別－被差別といった二項対立でしか把握されない関係性の幻想は、固着化した無味乾燥な人間関係しか想起させない。この固着化し凝固した他者との関係性を解きほぐし、発話や行動による相対的で柔軟な人間関係の構築を図るための緒を提示することは、博物館にとって重要な機能のひとつであるということになる。

V 展示表象論の射程

1 わたくしの立場と位置

このあたりで、わたくし自身の主体性に関わるアイデンティティについて述べ、自己表現の方法についてみておきたい。博物館の展示表象行為とは、つまるところ、学芸員の主体性と密接不可分であり、その表明もまた重要だと考えているからである。

さきにも触れたように、わたくしは、主に近代都市における「下層」社会をとりまく諸問題、とくに、部落や寄せ場の歴史を研究対象としつつ展示に携わっている。しかし、わたしは部落や寄せ場の住民でも出身者でもない。したがって、そうした地縁にもとづくアイデンティティをわたくしはもちあわせていない。さらに、その他の社会的差別問題とされる主題（民族、性、障害など）に即しながら付言すると、シャモ（和人）、ヤマトンチュ、日本人、男性、「健常者」……と、属性のどこを切り取ってみてもわたくしを「被差別者」として規定できない。つまり「非」被差別者なのである。そしてこれまで幾度となく、周囲の人びと（いわゆる被差別者）から、なぜわたくしが差別問題を専攻しているのか、そしてそのことが現代の差別とどう関わるのか、と問われた経験がある。わたくしも、そのような問いを自身にむけて発したことがなかったわけではないが、今ひとつ明確な応答ができなかった。

ただ、社会的差別に限定すると、「非」被差別者は当該問題をめぐる当事者でもある。つま

り差別は、「される側」の問題ではなく、「する側」の問題であり、双方の社会的な関係性に依拠している、という認識だけは判然ともちあわせている。そのことを踏まえて、社会的差別を問題にすると、まずは被差別者を取り巻く社会的状況を見極めて、反差別の思想を共有する可能性を探り、長期的な展望のもとに当事者／「非」当事者という二項対立の区分を戦略上、いったん無効にしてみたいと思っている。差別問題に絡んで生起する一方通行の抑圧構造（非対称性の権力構造）の存在は、確かにいづれの問題群を照射する場合にも明確に意識されねばならないが、差別－被差別関係を規定する要件は、つねに不安定であり絶対的なものではない。任意の問題群において被差別の側である人が、別の問題領域では、自覚の有無に関わらず差別する側に身を置くことになりがちな事態は日常的に生起している。このことを前提すれば、被差別者の日常的営為に対して深い洞察を伴わない安易な「当事者主義」の立場だけは回避したい。それゆえにこそ「非」被差別者なりに、自身の立ち位置や視点から社会的差別を問題にすることは十分可能なのである。

さらに付言すれば、差別を問題にするには、立場の違いが重要なのではなく、誰が発言し発信するのか、どこから語るのか、そして自分自身はいったい何者か、といった位置を明示することこそが重要ではないのだろうか。いうなれば、発話主体（発信者）の立ち位置こそが問われているのであり、その人の共属性は副次的な要素に過ぎないであろう⁹⁾。

属性は展示表象の真価を決定する必要条件ではあっても、十分条件ではないといえる。アイデンティティ¹⁰⁾が、生い立ちや自己認識といった個性性と一貫性、さらには、生活空間や人間関係、差異や葛藤といった共同性と同一性によって規定されるとすれば、時間と空間は誰もが分有するのであるから、アイデンティティは被差別者の「専売特許」ではないといえる。

2 資料の歴史的属性と実在性

「非」被差別者であるわたくしは、学芸員として展示表象行為をどのようにおこなっていけばよいのであろうか。もっとも、こうした難解な疑問を立ててみたところで、ここで答えられるわけではない。ここでは2、3の視点を提示して今後の議論と思索の糸口とを示しておきたい。

展示表象行為は、たいいていの場合、学芸員がすべておこなうのが当たり前だと考えられてきた。わたくしもその自明性に何ら疑問を差し挟んでこなかった。しかし、「パートナーシップ」と言うのであれば、被差別者を単なる資料提供者とみなし、学芸員が、資料の解説者として、被差別者をめぐる問題を代弁すればよいとする位置を選択していてよいわけではない。学芸員は、少なくとも展示表象行為に被差別者がどのように関わり得るのかを探り、常に自己省察的な態度をとっていないといけないだろう¹¹⁾。

その際、被差別者による自称（一人称）とその意味を深く洞察することは重要であり、展示

する側が用いる他称（三人称）を、短絡的に適用することの是非が問題となる。第三者がある集団や個人に対して一方的に付与する呼称（歴史的な呼称を含めて、現在にいたるもの）を無批判に用いることはできない。というのも、被差別者の日常を「被差別」の一言に収斂させることはできず、差別に対抗しつつ様々な位相で日常生活を営む個々の主体を無視して、その存在の固有の価値を抹消しては、単なるステレオタイプの画一的な被差別者像が一人歩きする危険性さえあるからである。

このことは、展示のテーマやタイトルなどは誰が決定するのかといった具体的表現内容に関わることであり、資料解説（キャプション）ひとつをとってみても、誰が如何なる言葉を用いて書くのか、学芸員の責任の所在はどの範囲か、といった問題にも直面する。博物館資料論ともリンクすることだが、資料はそもそも誰のものか、すなわち資料に表象される主体、あるいは記録されている主体といった問題を含む、資料の歴史的属性に関連してくることもなる。資料の歴史的属性を問題化し、そこに刻印されてきた被差別者の実像を照射することは、失われつつある社会問題をめぐる実在性（リアリティ）を回復することに繋がるだろう。

VI 小 括 —— 展示表象行為と社会的差別

本稿では、社会的差別を博物館が展示表象する際に生起する課題をわたくしの経験の省察を通して考察した。それにより、認識された課題は、社会的差別を展示主体が表象する際のメッセージ性の担保であり、社会的機能の通則から逸脱するだろう社会的機能の発見であり、記憶の分有を可能ならしめる透徹した姿勢であり、差別－被差別という固着化した二項対立思考の超克であり、「当事者」性の戦略的無効化などであった。これらは社会的差別を対象とする展示表象において、誰しものが直面する課題である。

近年の社会的差別で世間の耳目を集めているのは、「格差」や「貧困」などであり、そうした地位を生じさせる社会的原因として、「学歴」「職業観」「血筋」「国籍」などがあげられるのが一般的である。近代日本が創造し、現代社会においてもなお機能し続けている多くの価値基準や社会規範は、近年になって再びその有効性が問い直されている¹²⁾ものの、既に日本社会全般に網の目のようにはり巡らされていることに変わりはない。それゆえ誰もが「被りうる」つまり、差別される側になりうる可能をもっている一方、誰もが差別する側にもなりうるということになる。だとすれば、そもそも差別という認識自体、自明の前提とされてきた特定の社会的属性に対して適用しているだけでは把握しきれない本質的な問題群ということになる。

社会全体を覆うこうした本質的な問題群は、個々の差別の根拠となっていて、なおかつ人権問題一般にはけっして回収されえない。その意味で、複合的かつ重層的であると指摘されることの多い差別の仕組みを問う視点を展示の核心に据えるには、本稿で指摘したいいくつかの課題

そのものに対してポジティブに挑むことしかないといえる。そのための方法がまさに、本稿で縷々叙述してきた社会的差別と向き合うことなのである。

現代社会において博物館の表象行為が社会的差別に対抗する思考を発展させるきっかけづくりの場として有効に機能すると考えるならば、展示主体がまず自己の立場を表明することと、思想的な位置を明確にすることなくしては、展示表象行為をおこなうことはできない。自己弁明を欠いては、社会的差別を対象化することはおろか、他者とのパートナーシップなど構築できるはずはないと確信している。そのうえで、現在性を追究するためのパースペクティブを明示し、展示表象行為の可能性を少しでも広げていくこと。そのことこそが、異論を差し挟む余地のある展示表象を可能にし、メッセージを伴いつつ発話しつつ、絶えず自己検証する博物館を構築する有効な方法といえるであろう。

付記 本稿は、2008年9月に京都大学人文科学研究所で開催された共同研究における報告と討論をもとに、その後に開催された共同研究での議論で得た知見を加えて執筆したものである。闊達で刺激的な研究の場をご提供いただいている共同研究会代表の竹沢泰子氏と、研究会のメンバーの方々に、心よりお礼を申し上げたい。

註

- 1) いわゆる言語論的転回以後の歴史学では、歴史哲学における構成（構造）主義による「物語行為」論の提唱と、それへの実証主義歴史学からの応答が展開されてきた。とりわけ、上野千鶴子と吉見義明、上野輝将らの論争、野家啓一と高橋哲哉の論争は、日本軍「慰安婦」問題と戦争責任論いう極めてアクチュアルかつラジカルな問題をめぐっておこなわれたものだけに、論者の関心はより高くなった。これらの論争はいちおう「物語行為」論争とよばれている。
- 2) ハインペルは、「四重」の内容を、①時の流れの波としての現在、②過去と未来とに持続する現在、③時の隔絶のなかでの1回限りの現在、④決断をとまなうわれわれの現在、であるとし、とくに④は人々の間で共有されていないと論じた。
- 3) 「当事者」性は、いうまでもなく社会関係によって構築される表象であるから、固定的・画一的な存在ではない。したがって本稿ではこの用語にすべてカギ括弧をつけている。その他の用語についてもカギ括弧を多用しているが、その理由は、一般的に通用している用語や事柄そのものを相対化する必要があるためである。
- 4) 被差別者（被抑圧者）に最も近い視点にたった「差別」の定義については、ガヤトリ＝スピヴァック [スピヴァック 1998]、ジュディス＝バトラー [バトラー 2002]、さらに両者の議論を統一的に把握してアイデンティティの権力性を明白にし、差別の定義づけを有効におこなった坂本佳鶴恵 [坂本 2005] から多くの知見を得ている。
- 5) 「絵図（古地図）」の歴史資料としての価値については、多くの論者がこれまでも指摘してきたところであるが、わたくしは、身分制支配や都市空間および村落共同体と差別との関係を究明

するうえで、必要不可欠な重要資料であると考えている。また、その展示公開を積極的に推進せずに、被差別民記事を抹消したり、絵図そのものの存在を隠蔽する行為は、学術研究の阻害という以上に、現代社会の差別問題の「抹殺」行為に他ならないと考えている。

- 6) 「地域」の定義は論者によってまちまちである。今のところ、わたくしは、「地域」を定義する際に、国有の歴史や共同体の歴史的な性格を念頭においている。
- 7) 学芸員間の交流と博物館情報の共有化は各地で進んでいるが、関西の動き〔歴史学と博物館のあり方を考える会 2001〕、四国の動向〔徳島博物館研究会 2002, 2006〕、関東の交流〔神奈川県博物館協会 2005〕、〔8人の学芸員 2007〕などは先駆的で象徴的なものであろう。
- 8) 博物館学を論じる際にその体系として、一般的に採用される理論学（Museology）と実践学（Museography）からは多岐に亘る博物館の機能を解析するツールが参照できるが〔加藤有次他 2000〕、社会的差別や戦争などのタームを双方の論理的支柱がカバーできるとは考えられない。わたくしは、全般的な博物館学の構築は重要性を有するものであるものの、個別の博物館のテーマに即した学問的体系が議論される必要性を痛感している。
- 9) 自己の立場性については、久留島浩が歴史学の立場から史料論を踏まえて『『自分自身の現実』（立場性と置き換えてもよい）を見極めたうえで過去（他者の現実）と向き合うことが、個々の歴史家に問われていると思われる〕と述べている〔久留島 2002〕。久留島の論じる「歴史展示」というコンテキストからすると、「歴史家」を「学芸員」に置換えてもまったく同様の指摘が可能であろう。さらに成田龍一が警鐘をならした「当事者」性への安易な同調にも関心を払っておかねばならない〔成田 2001〕。
- 10) エリック＝エリクソンがいうように「アイデンティティ」の原義を、「私」のなかの統一性と連続性であり、かつ他者による「私」の中核部分の共有ないし承認、と規定すれば〔エリクソン 1973〕、「アイデンティティ」そのものは、個人（個体）と、集団（クラス）との双方に帰属することになる。
- 11) この点、最も示唆に富んでいるのは、国立民族学博物館で 1997 年に開催された企画展『異文化へのまなざし』を担当した吉田憲司の議論である。吉田は、博物館の民族誌展示を「展示する者」「展示される者」「展示を見る者」の 3 者の「対話」関係であることを前提として論究する。そして「日本にいるわれわれは、いつのまにか西洋にみずからをなぞらえ、西洋の作り出した「異文化」観を受け継いでしまったのではなかったか。「異文化へのまなざし」展は、まさにこうしたわれわれ自身の「異文化」観、あるいは「異文化へのまなざし」に焦点をあてたものである」と、自己を含む日本人の思惟様式を明解に指摘している〔吉田 1999〕。
- 12) その問い直しの作業として最も野心的、論理的かつ体系的なものは、姜尚中や小森陽一らの議論であろう〔姜ほか 2002〕〔小森ほか 2005, 2009〕。

引用文献

- エリック＝エリクソン『アイデンティティ』金沢文庫、1973
小川伸彦「モノと記憶の保存」荻野昌弘編『文化遺産の社会学』新曜社、2002
岡真理『記憶／物語』岩波書店、2000
神奈川県博物館協会編『学芸員の仕事』岩田書院、2005
加藤有次ほか『〈新版博物館学講座 1〉博物館学概論』雄山閣出版、2000

- 金子淳『博物館の政治学』青弓社，2001
- 金子淳「歴史展示の政治性」『歴史展示とは何か』国立歴史民俗博物館，2003
- 金子淳「戦争資料のリアリティ」『岩波講座 アジア・太平洋戦争 6』岩波書店，2006
- ガヤトリ・スピヴァク『サバルタンは語ることができるか』みすず書房，1998
- 久留島浩「史料と歴史叙述」『歴史学における方法的転回』青木書店，2002
- 姜尚中ほか『思考をひらく』岩波書店，2002
- 小森陽一ほか『変容する思考』岩波書店，2005
- 小森陽一ほか『壊れゆく世界と時代の課題』岩波書店，2009
- ジュディス・バトラー『偶発性・ヘゲモニー・普遍』青土社，2002
- 竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う』人文書院，2005
- 竹沢泰子編『人種の表象と社会的リアリティ』岩波書店，2009
- 千野香織「戦争と植民地の展示」『〈越境する知1〉身体：よみがえる』岩波書店，2000
- デレ＝ジェゲデ「異文化の展示，表象，誤った表象」
- 『文化を超えた対話にむけて』〈報告レジュメ〉国立民族学博物館，1997
- 徳島博物館研究会編『地域に生きる博物館』教育出版センター，2002
- 徳島博物館研究会編『博物館が好きっ！』教育出版センター，2006
- 成田龍一『〈歴史〉はいかに語られるか』日本放送出版協会，2001
- 8人の学芸員『博物館の仕事』岩田書院，2007
- ヘルマン＝ハイネベル『人間とその現在』未来社，1975
- 吉田憲司『文化の「発見」』岩波書店，1999
- 吉村智博「絵図の展示公開とその意義」『絵図に描かれた被差別民』大阪人権博物館，2001
- 歴史学と博物館のあり方を考える会編・刊『現場から』2001

要 旨

本稿は、社会的差別というテーマを博物館が展示する際に生起する表象をめぐる課題について考察する。博物館論を念頭に置きつつ、人権問題を扱う地域博物館の学芸員としてわたくしが経験したことにそくして考えてみたい。

本稿では、差異の表象に関する諸問題を中心に検討する。従来の研究では、そのような問題は主にテキスト分析を通してなされてきたが、学芸員自身の日常的な営為については、十分に探求の眼差しが向けられてきたとは言い難い。しかし、博物館展示のもつ広い社会的影響力を考慮すると、社会的差別のような抽象的なテーマに取り組む学芸員の日常的な営為を取り上げることに意義が見出せる。

わたくしの場合は、近代日本社会において「部落民」として差別を受けてきた人びとをめぐる展示を通して、いわゆるタブーに挑戦したのであるが、そこから博物館と学芸員にとっての新たな役割と任務が明らかになった。それは、博物館展示においては観覧者（来館者）と常に情報交換と意思疎通や交渉をすること、当事者、研究者、教育関係者、観覧者（来館者）と協同すること、そして差別―被差別の二項対立概念を超えること、さらに「当事者」という概念を問うことである。

博物館展示が、社会的差別に対抗する思考を発展させる契機をつくりだすのに有効であるとするならば、博物館と学芸員は展示主体として自己の立場と立ち位置を表明すべきである。「中立性」や「客観性」を追求しようとする、むしろ被差別当事者（あるいは集団）に対する誤解を再生産させかねないからである。ゆえに、博物館展示では歴史的資料を元の文脈から切断して現代の文脈に置換する際、それについて固有の位置づけや解釈を示すことが必要とされるのである。そのことは、私たちが博物館展示に対して、より再帰的な方法と実践をひらくことを可能にするだろう。

キーワード：表象行為、当事者性、差別、人権、記憶装置、他者認識、発話主体

Abstract

This paper aims to examine the ways in which representation matters at museum exhibitions taking up the theme of social discrimination. Informed by developments in museum studies, it offers my reflections on my experience as a curator of a local museum, which focused on human rights exhibits.

The central aim of this paper is to discuss issues concerning the representation of difference. Such issues have thus far been explored mainly through text. Yet considering its wider social influence, it is worth exploring daily practice of curators who tackle such an abstractive theme as social discrimination.

Through reflections on my experience with a taboo challenging exhibition on the historically persecuted burakumin in early modern Japan, this paper identifies new roles and missions for curators and museums. These include: communicating with viewers through museum exhibitions, collaborating and negotiating with the 'insiders', scholars, educators and visitors, going beyond the dichotomy between discriminator and discriminated, and questioning the notion of the 'insider'.

If museum exhibitions are to work against discriminatory ideology, curators and museums must reveal their positions and positionality. Pursuing neutrality and objectivity is rather likely to result in the perpetuation of misunderstandings and prejudice against minority groups in the present day. It is thus necessary to show one's own interpretation of historical objects when replacing them in the current context. It will enable us to develop a more reflective approach and practice with regard to museum exhibits.